

# ICT機器（TV会議システム・タブレット型端末）を活用した不登校児童生徒への支援と学校復帰へのきっかけ作り

京田辺市教育委員会（適応指導教室）

〒610-0393  
京都府京田辺市田辺80番地<http://www.kyotanabe.ed.jp/>

## 1. 研究の背景

文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において、様々な心身的な理由により学校に登校できず、年間 30 日以上の不登校の状態にある児童生徒が、平成 25 年度約 12 万人程度おり、小学校では 0.4%、中学校では 2.7%となっている。本市においても不登校児童生徒の現状は、平成 24 年度小学校において 0.34%、中学校においては 4.17%、平成 25 年度小学校において 0.26%、中学校においては 3.94%となり、中学校においては国、京都府平均（平成 25 年度小学校 0.31%中学校 2.62%）を上回る状況である。

本市教育委員会は平成 10 年 4 月に適応指導教室を立ち上げ、市内 3 か所（中学校ブロックに 1 か所）で公民館や住民センターの会議室等を活用して活動を始めた。平成 19 年 4 月、市内 3 か所で週 2 回のペースで開設していた適応指導教室を 1 か所にまとめ、常設の適応指導教室（通称ポットラック）を開設し、不登校をはじめとする学校不適応の児童生徒への対応・指導と教育相談活動を行い、学校復帰を目指して取り組んできた。同時に平成 25 年から市教育委員会事務局に臨床心理士を配置し、適応指導教室のスーパーバイザーとしても活用していくこととした。しかしながら取組を進める上で、学校不適応を示す児童生徒の多くが学校生活において、人間関係を築くことや学習の継続性を苦手としていることが浮きぼりにされてきた。そのために通級している児童生徒のコミュニケーション能力の育成と学力保障が切実な課題となっている

## 2. 研究の目的

この現状を踏まえ、本市教育委員会としては課題克服のため次の 2 点に重点を置き、適応指導教室での実践を通して各校で実施している不登校児童生徒の別室指導や特別支援学級の指導へと波及させていきたい。その手段として、ICT のいろいろなツールを児童生徒の特性に応じて活用することで、学校不適応を示している児童生徒の課題解決のきっかけ作りができ、学校復帰を進める上での壁を少しでも取り除き、学校復帰へのきっかけ作りとなるのではないかと考えている。ICT を児童生徒の特性に応じて活用することで、課題を一つひとつ克服または軽減することができ、学習や活動への意欲につながっていくと考えている。また同時に、学力保障にも繋がるとも考えている。

### （1）コミュニケーション能力の育成

TV 会議システムを利用し、学校行事や授業の様子を適応指導教室で放映することにより常に学校の一員であることを自覚させるとともに、担任や養護教諭をはじめとする教員や友人との TV 会議システムを通して面談を行い、コミュニケーションを深め、人間関係形成のきっかけ作りとする。

## (2) タブレット型端末を利用した学習支援

タブレット型端末を利用し、デジタル教科書や多彩なアプリを用いて反復学習等に取り組み、基礎学力の定着を図る。

### 3. 研究の方法

#### (1) TV 会議システム

##### ア 学校行事や授業への参加

学校の一員であることを自覚させるとともに、行事や授業に参加しているという実感を体感させることを目的とする。学校生活にギャップを持たず学校復帰できるきっかけ作りになるよう取り組んでいきたい。また、TV 会議システムの良さを生かし友人からの呼びかけや、ひいては本人の参加も目標とする。

##### イ 面談

家庭訪問や適応指導教室訪問等でのみ実施していた学校教員との面談を、TV 会議システムを利用し、機会を増やしていく。児童生徒には、養護教諭や学年担当等多くの教員が関わっていることを知らせるとともに、人間関係形成のきっかけ作りのツールとして活用する。

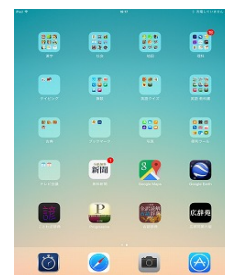
#### (2) タブレット端末の活用

##### ア 学習の機会を促すためのツール

デジタル教科書や学習支援アプリを活用し、自分のペースで繰り返し学習を進め、学習の継続と積み上げを行うことで基礎学力の定着を図ることができると考える。簡単なゲーム的な学習ソフトや学校で使用しているワークシートやドリル等、各個人に応じた学習を進めていくことができ、学習の機会提供や習慣化のきっかけ作りのツールとして活用する。

##### イ 学習の支援ツール

タブレット型端末を利用したカメラ機能や通信機能、インターネットを利用した調べ学習等学習を進めていく上での支援のツールとして活用する。



iPad の画面

### 4. 研究の内容・経過

#### (1) 指導員の ICT 活用能力の育成と ICT 環境の整備

当初、研究を進めていくうえで次の点に重点を置いて取組を進めていくこととした。

##### ア 研修会の実施

アナログ中心の活動からデジタル化への移行、また新しい ICT 機器の導入するにあたり研修会や実技研修会を実施し、ICT 活用能力の育成を目指した。また、教育委員会事務局に常駐している情報教育コーディネーターを適応指導教室に派遣し活用の支援を行うようにした。また、毎月開催している部内会議においても取組状況の交流やより有効に活用できるような実技研修の時間を取るようにした。



研修会の様子

## イ ICT 環境の整備

今回の研究を進めていく中で環境の整備にも取り組んだ。

### (ア) TV 会議システムの整備

適応指導教室・各学校（通室している児童生徒が在籍）・教育委員会に設置

### (イ) タブレット端末の購入

タブレット端末（iPad）5 台と TV に接続できる機器（AppleTV）を新規購入

### (ウ) 学習用アプリの購入

先進県の取組等を参考にするとともに、指導員の希望や通室している児童生徒の要望から、様々な学習用アプリを購入した。簡単な入力のみでできるアプリ、検定形式になっているアプリ、ゲーム感覚でできるアプリ、ドリル形式や教科書に準拠したもの、辞書機能を有したアプリ等購入することができた。

## (2) データのデジタル化

### ア 連絡体制のデジタル化

これまでの活動においては、児童生徒の活動の様子や在籍校担任との連絡は紙媒体が中心となっていた。そこでコーディネータの指導の下、徐々にではあるがデジタル化していく取組を行った。児童生徒個人のデータの管理やメールを活用した学校との連絡から始めることができた。

### イ ホームページの活用

教室内で様子や様々な活動の様子をホームページで紹介できるよう準備を進めていった。ただ、保護者の中には、写真等から子どもを限定されることを嫌がられる傾向が強く、そのため限定のグループ機能を活用し、学校関係者、保護者のみパスワードを配布しての公開とするようにした。

## (3) TV 会議システムの活用

### ア 学校行事の中継

体育大会や合唱コンクール、卒業生を送る会、卒業証書授与式等 TV 会議システムを活用して生中継するようにした。学校の一員であるという自覚と、参加しているという実感を持たせることを目的とした。iPad を利用して中継をし、AppleTV で TV に映すというスタイルで取り組むことができた。授業の様子も取り組もうとしたが学習状況に大きな差が見られるため生中継まではできなかった。



中継を見る生徒

### イ 適応指導教室の中継

適応指導教室での活動時間は、学校と同じであるため、なかなか教職員が参観等する機会を設けることが困難な状況にある。そこで、適応指導教室での様子を在籍校の先生方に広く知ってもらうことや、通室している児童生徒の様子を知ってもらうことを目的に毎日午前 9 時から 12 時までの 3 時間、適応指導教室の様子を固定カメラで生中継し職員室から見られるようにした。

### ウ 面談

適応指導教室と学校とのパイプとして TV 会議システムを利用できるようにした。中継にはシステム会社の協力も得られ、iPad でも活用できるように改良され、いつでも使用できるようになった。指導員と学校担当者から始め、児童生徒と担任や養護教諭、児童生徒どうしと考えていたが、通室している児童生徒の課題が大きく、指導者と学校担当者へのみの活用にしか至らなかった。

#### (4) タブレット端末の活用

##### ア 日々の学習での利活用

日々の学習の中で、児童生徒が意欲的にタブレット端末を活用して、学習支援アプリやデジタル教科書を利用して学習を進めていくことができるようになった。児童生徒の多くは、家庭での生活の中でゲーム機やスマートフォン等使って過ごしているため、学習よりもゲーム等に利用するのではないかと心配する指導員もいたが、逆にインターネット等に興味関心が高く、機器の使用を抵抗なく受入れ、その使用方法を指導員に教える場面も見られた。



##### イ 様々な場面での利活用

適応指導教室で実技教科の学習や様々な行事にもタブレット端末を活用することができた。例えば、調理実習においてレシピを検索し、材料の購入計画を立て、地図アプリを活用して児童生徒のみで買い物に行くことや調理実習中は再度レシピを参考にして調理する者、その様子をカメラに撮る者と児童生徒の工夫で利活用することができるようになった。

### 5. 研究の成果

今回の研究を通して大きな成果として次の2点があげられる

- (1) 体育大会中継を見ている時、児童生徒の中で「本物はもっと迫力があるかなあ？見に行こうか？」という声上がり、グラウンドの外からではあったが、全員で体育大会を見に行くことができたことである。担任や関係の教職員とも会話することもでき、児童生徒が、学校へ近づくことすら嫌がっていたことを忘れてしまう1日であった。
- (2) 2学期後半から1名の生徒が学校に復帰しようとチャレンジしたことである。最終的には再び適応指導教室に戻ってきたが大きな1歩であった。

TV会議システムの活用やタブレット端末の利用等のICT機器の利活用は、通級生徒の学習意欲の喚起やできる喜び、人との繋がりやきっかけ作りとして大きな影響があったと考えている。

### 6. 今後の課題・展望

不登校の児童生徒のそれぞれが持っている課題は幅広く、簡単に糸口を見いだすことができないのが現実であった。一人一人を見つめ直し、個々の課題を十分理解した上で、本人に最も適した学習環境に近づけていけるよう対応する必要があると感じた。

今後の展望として、今回の研究を更に深め、ホームページのCMS機能を利用して日誌を書くことによるコミュニケーション能力の育成、TV会議システムを利用し、学校行事や授業の様子を適応指導教室で放映することにより、常に学校の一員であることを自覚させること、TV会議システムを利用して面談を行い、コミュニケーションを深め、人間関係形成のきっかけ作りとすること、タブレット型端末を利用し、デジタル教科書や多彩なアプリを通して反復学習等に取り組み、基礎学力の定着を図ること等、今回十分できなかったことを更に進めていきたい。

## 7. おわりに

今後、この研究で得た成果を、各学校の教室に入れない児童生徒の指導を行っている別室指導や特別支援学級の指導を始め、各分野の指導において活かすことができるよう、本市教育委員会として、市内各小中学校へ波及させていくことを目指していきたいと考えている。